研修成果報告書

研修テーマ：暮らし観光から考える大衆に向けない観光の在り方とは

研修場所：嬉野温泉　旅館大村屋

研修期間： 1 月 29～31 日

研修参加人数： 4 人

今回の嬉野温泉での国内研修は、旅館大村屋の 15 代目当主・北川健太氏と共に、その町に暮らす人々の生活を「一緒に過ごす、実際に入ってみる」ことから始まった。私たちが体験した「暮らし観光」とは、単に有名な観光スポットを巡るのではなく、地元の人に愛されているお店や人に出会い、その町の「暮らし」そのものを資源として捉える旅である。研修中、何気ない路地裏や商店を巡る中で、嬉野という町が持つ独特の温度を感じることができた。観光客として消費するだけの関係ではなく、一人の人間として町と関わり、「また来たい」ではなく「また会いましょう」という再会の約束が生まれる。私は、それこそが暮らし観光から考える大衆に向けない観光の在り方だと考えた。

研修の 1 日目は、北川さんと共にまちあるきに参加し、町を知ることに時間を費やした。最初に訪れたシーボルトの湯は嬉野温泉発祥の地であり、朝6時には決まったメンバーが集まるコミュニティスペースとなっている。かつては川から温泉が湧いており、お湯で洗濯ができることから「温泉地にお嫁に行く人は幸せだ」と言われていたというエピソードをお聞きし、温泉が単なる娯楽ではなく生活に密着した豊かな価値であったことを知った。次に訪れたきはらでは、店主のきはらさんが手作りのおかずを販売しており、お年寄りでも食べやすい量を意識して提供されている。また、親子三世代で利用される Asahiyasan という服屋では、家族で温泉に来た人の憩いの場になればという思いで娘さんがポップを開発しており、家族の温かな営みが感じられた。北川さんが町の人を紹介する際、決して「従業員」や「店主」といった役割で終わらせないことが強く印象に残った。「この人は〇〇出身で移住してきたんですよ」「実は〇〇さんはこれが大好きなんです」といった、その人のパーソナリティが見える紹介の仕方は、観光客と住民の間にあった見えない壁を溶かし、人間対人間の出会いへと昇華させていた。

１日目の夜に訪れた Tea Salon TSUBAKI の宮下さんとの対話では、マスツーリズムと暮らし観光の違いについて深く考えさせられた。宮下さんはご自身の難病という経験を持ちながら、人の役に立つことを目標に、お茶や日本文化への好きを掛け合わせてサロンを開店されていた。食器や素材、そして人に会うことにこだわり、好きなものに囲まれて表現することの楽しさが伝わってきた。「自分の大切だと思うものを大切にしたい、それを人に届けたい」という宮下さんの自分を起点にした思いは、暮らし観光の核心を体現していたと考えた。相手に合わせるマーケティングではなく、自分の思いを起点にするブランディングこそが、町の磁力となっているのだ。暮らし観光とは、誰でも呼びたいわけではなく、本当にその良さを感じてくれる人を求める誠実な選択であり、こうした風土が好きな人が集まるからこそ、「ここに住みたい」という感覚が芽生えるのだと感じた。

かつて研修で訪れた神奈川県真鶴町でも「町が移住者を選ぶまちづくり」という独自の仕組みを学んだが、嬉野との信頼構築のプロセスの違いは非常に興味深かった。真鶴では真鶴出版のような移住者が中心となり、一歩ずつ住民と信頼を築きながら町の当たり前を価値として翻訳していく対話による開拓が行われていた。草柳商店のあーちゃんのように、住民が自然に集まるコミュニティを大切に育んでいる姿はあったが、移住者が中心であるがゆえに信頼を作るところから始まる難しさもあった。それに対し、嬉野は地域に根ざした老舗旅館の当主である北川さんが旗振り役となっている。既に地域に深く根付いた「大村屋」という揺るぎない信頼がベースにあるため、住民も自然に参加しやすく、取り組みが町全体に浸透しやすい環境がある。嬉野に元々ある「来た人を大切に、欲張らない」という風土が、北川さんの暮らし観光という形で体現され、続いていく。この住民参加型の形こそが、嬉野の大きな特徴であると感じた。

２日目は「茶輪」というティーツーリズムを体験し、嬉野茶を持ってサイクリングをしながら町の風景に実際に入り込んだ。ティーツーリズムとは嬉野町が行なっている嬉野茶を扱った体験型プログラムである。実際に体験して感じたのは、町本来の姿を壊すことなく、活かして伝えるという嬉野らしい観光の姿が見えたということだ。温泉食堂やこころここにあらずで食事をし、お店の方から住民視点の暮らし観光をお聞きしたり、夜には大村屋のバーや貸切風呂を体験したりすることで、旅館という場がどのように町と繋がっているのかを実感した。３日目にはわたや別荘を訪れ、お香やスイーツ、書店などが共生する空間を見学した。そこには表面的な観光ではなく、人と人を繋いでくれる装置としての店が存在しており、ここでの暮らしが地続きであると感じた。

暮らし観光の成功指標は、宿泊者数や消費額といった数値だけでは測れない。それは、数値化しにくい「再会の約束」であると考えた。研修中、移住者の方が営む店を訪れ、その想いを聞くことで、私にとって嬉野は地図上の点から知っている人がいる場所へと変わった。それは、そこに生きる人々の情熱や葛藤といった温度を共有したからに他ならない。マスツーリズムが消費して終わりの完結型であるのに対し、暮らし観光は継続する関係性の開始点であると考えた。その結果として、私たちは研修中の対話を通じて、夏にお祭りを手伝いに来ないかというお誘いをいただくことができた。これは、観光客という枠を超え、地域の営みに混ざるための具体的な参加権をいただいたような感覚である。

今回の研修を通じ、地域づくりとは立派な施設を作ることではなく、良好な繋がりを育むことであると確信した。真鶴で学んだ「それぞれが得意な分野で補い合って暮らしを作り上げる重要性」、そして嬉野で体験した「既存の信頼を土台に日常を開いていく力」。これらは、私が目指すコミュニティのあり方を照らす大きな指針となったように感じる。一方で、研修を終えて新たに湧いた疑問もある。暮らし観光が注目され、訪れる人が増えた際に、嬉野が持つ現在の温度や住民の平穏な暮らしをどう守り続けていくべきか。宿の数やキャパシティには限りがあり、安易に人を呼び込むことはオーバーツーリズムを招く懸念がある。また、全ての地域が暮らし観光を目指すべきなのか、その土地の風土に合わせた多様なあり方についても検討が必要だと感じた。今後は「また会いましょう」という再会の約束を大切にしながら、単なるゲストとしてだけでなく、お祭りの手伝いのような地域を支える側としても関わりを深めていきたい。今回の研修で得た「来た人を大切に、欲張らない」という視点を、大学での学びや地域活動の実践に具体的に繋げ、持続可能な地域社会のあり方を追求していきたい。

以上